
はじまり

こつぶ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

はじまり

【Nコード】

N5906L

【作者名】

こつぶ

【あらすじ】

Candlelight閉鎖に伴い、移行作品。&2006年度宮野の日投稿作品。

原作2巻、18巻、41巻ネタ（笑）。なぜ、明美は志保に渡すカセットテープをトイレに隠すという経緯を思い至ったか。その謎解きと、またそのとき思っていた明美の強い決意、そして妹への愛情の深さを精一杯にこめた中編です。

当時まだサンデーでの公式設定がない部分があり、現在発表してい

る設定はいくつかあるかと思いますが、当時の文章そのままにしています。目を瞑ってくださいようよろしく願います。ちなみに、「あの空のどこかで」と設定がリンクしていたりしますので、よろしく願います。

※明美と志保さんの話で、コナンくんや哀ちゃんもは登場しません。

「おかーさん、おとーさん。今日は一体どこへ行くの？」

信号が赤になり、ちょうど停車した車内で、後部座席にいたその黒髪の少女は大きく前方へ身を乗り出した。運転席にはロマンスグレーの少しウェーブがかった髪を短く刈った、黒縁の眼鏡をかけた父と、助手席にはさらさらとしたミディアムロングの髪を持つ異国の血を受け継いだ母。その母の髪はつやつやとした緋色をしていて、少女はその色になることを切望していた。だから同じ色素を持って生まれた、まだ1歳にも満たないその妹がとても羨ましかった。もちろんそのたびに「貴方の髪の色も素敵よ」と、その繊細すぎるほどの白くて細い指先で、優しく彼女の黒髪を撫でてくれるのだけでも。

「・・・ねえ、本当に今からどこに行くの？志保ちゃんは一体どこにいるの？」

終始無言の両親に、少女は今までの華やいでいた気持ちも一瞬のうちに消え、みるみるうちに顔を曇らせていった。先週から姿を見せない妹。いなくなったときは、すぐ帰ってくるだろうと思ったけれども、妹が居なくなっただけに1週間。さすがに不安が募っていた。まさか自分までどこかに連れて行かれることはないだろうか。

「ねえ、おかーさんってば」

「お父さんの昔住んでた家だよ」

運転席で今まで黙っていた父が少女を^{たしな}嗜めるように穏やかな声で言った。

「ちょっと用があってね。話をしたいんだ」

「・・・そう。じゃあそのあと、前行ったステーキ屋さんに連れてってくれる？お子様ランチがとってもとっても美味しいんだよねっ」

手を一杯広げ尺を作る少女に対して、母は小さく笑った。そしてもちろんよ、と答えてくれる。父も久しぶりだな、と大きく笑って見せた。その笑った声がいつもより少し不思議な感じがした。けれど、自分を構ってくれたことが嬉しくて、少女はさらに質問を投げかける。

「志保ちゃんは何？志保ちゃんはどこにいるの？」

そのとたん、再び空気が凍りついたような、重苦しい沈黙が訪れたことに、少女は敏感に勘付いてしまった。それで居心地が悪くなって、思わずももぞと居住まいを正してから、顔色を伺うようにおずおずと両親の顔を交互に見つめた。

「・・・志保はね・・・ちょっと遠いところに行っているんだよ」

長い空白のあと、溜息を一つついて、ようやく赤から青に変わった信号の先を見つめながら父親は答えた。バッグミラー越しに映る黒い車体。それを確認してからアクセルをゆっくり踏むと、車体は前方にゆっくりと動き始める。

「・・・遠いところ？」

「・・・そう。遠いところ。志保はね、ちょっと長いご旅行に行ってしまったのよ」

少し震えた声で母親は答える。ふうん、と少女は大きくうなずいた。わかったようなわかってないような。そんな感じだったのだ。

「…………じゃあ長いご旅行から帰ってきたら、お土産買ってきてくれるかな？志保は小さいから無理かもしれないねえ。重たいから持てないよねえ？ねえ……おか……」

少女は目の前の座席に座っている母親の肩が小刻みに震えているのを気がついた。静かに嗚咽を漏らしているのも。

「…………さん？」

「エレーナ」

静かに、しかし重みのある声で父親が母親を諭す。それは泣いていることぐらい、もうすぐ5つになる少女にはわかっていた。けれども、何故泣いているのかがわからなくて、おろおろとするしかなくて。

「…………どうしたの？ねえ……」

「明美」

母親の、涙をこくと飲む音が少女の耳にも確かに届いた。そしてはらりと一滴落ちる涙の粒も確かに目にした。しかし助手席から振り返り、そっと少女の柔らかな頬を両手でふくふくと包んでくれるその顔はいつもの母親の顔だった。なおも心配になって母親の表情を見つめるが、そのうちその手の柔らかさが、そして温かさが嬉しくて、くすぐったいような笑みをして、少女は思わず身を振った。そんな自分の様子に母親はさらに微笑する。

「…………大丈夫よ？また一緒に暮らせる日がくるようになるから……。そのときはまた志保のお世話、お願いね？志保のこと、いつ

ぱい守ってあげてね」

「・・・うんっ」

少女は満面の笑みで大きく頷いた――

「・・・でも『長い』って言っても限度があるわよね・・・」

「・・・え？」

お気に入りのお喫茶店で、お気に入りのおグレイプフルーツジュースをストローで啜りながら、姉、宮野明美は、昔のことを思い出し、小さく溜息をつく。その表情に妹である志保は、ほんの少し不思議そうな顔をして聞き返した。

「なんでもないわ」

そう笑ってごまかした後で、明美は一瞬口を噤み、それからさつと辺りを見回した。店の外には、電信柱に一人、向こうの通りに二人。それに店の中にも三人。その姿を確かめて、はあ、と溜息をつく。今日も自分の手の中にあるカセットテープは妹の手に届くこと

はない。いつになったら妹にこのテープを渡すことができるのだろう。きっと志保は母や父の愛に飢えているのに違いないのに。

妹の言葉は父母をまるで他人のことを言うかのようにいつも淡泊だった。生まれて半年経ったばかりで組織の施設に預けられたきり一度も会っていないのだから、両親を覚えていないといえは当然のことなのだけれども、一度も愛を受けた覚えがないというのは悲しすぎる。あんなに愛された数ヶ月があるというのに。志保が居なくなった後も両親の彼女を愛する気持ちは強く、そして逢えないことでさらに強くなっていったというのに。それを知らないでいることは、きつと妹にとって辛すぎる。

突然妹が居なくなったときは本当に旅行に行ってしまったのだと思っていたけれど、年を重ねるに連れて、あの時両親が自分に向けて言った言葉は、幼いわが子を氣遣って口にした、その場しのぎの嘘であるということに気づいてしまった。そして11の冬、ようやく母親に本当のことを聞かされた。それは母親にとってずっと隠し通したかった事実のようだった。鬼気迫る表情で、言葉の端を震えさせながらも、何とかして伝えようとする母の様子に、自分もいつのまにかボロボロと涙を流していたような気がする。生まれたときから定められてしまっていた、悲しすぎる妹の運命。それに対比して、初子だからという理由でその運命を免れた自分。あのときはどれほどその事実ショックを受けたかわからない。けれど、今まで自分を心配させることは一つも口にしなかった母が突然話したその重すぎる内容に、何か不吉な予感を感じて、夜も眠れない日々が続いていた。

そして、その予感は的中した。

その言葉と、母の声が残る4つのカセットテープを残して、母は、父とともに自分の元から永遠に姿を消したのだ。

「・・・どうしたの？ボーっとしちゃって。お姉ちゃんらしくないわよ？風邪でもひいたんじゃない？」

その声によりやく我に返ると、心配そうに妹が自分を見つめていた。目の前のグレープフルーツジュースの氷が溶けて、カラン、と涼やかな音を出す。

「そうかもしれないわね。このところ仕事を立てこんでて」

「もう・・・。体には十分気をつけてっていつも言ってるじゃない。お姉ちゃんはこの世でたった一人の身内なのよ？お姉ちゃんがいなくなったら私・・・」

「はいはい」

どっちが『お姉ちゃん』なんだか。

明美は思わずおかしくなって口元を綻ばせた。

「そうそう、仕事といえね・・・」

ふと、思い出したように妹は表情を強張らせた。所謂仕事の顔。
・明美が唯一嫌いな妹の表情である。

「何・・・？」

「工藤新一って知ってる？」

「・・・くどう？・・・ああ・・・何々？あの巷で有名の高校生探偵じゃない。『頭脳明晰、ルックスもよく、優しくかつ甘く蕩けるようなその視線に、世の女性はメロメロ』・・・ってどこかの雑誌で読んだことあるけど・・・。まさか」

ようやく志保も男に目覚める余裕が出たのかと半信半疑で、しかしとても嬉しくて、明美は思わず笑みを零して妹を半月状の瞳をし

て見つめる。

「・・・違うわよ。そんなわけじゃない。ちょっと仕事で行ったの。彼の家にね」

呆れた顔で一蹴する妹に、明美はなんだ、とガツカリして表情を元に戻した。しかし一方である種の不安が過る。工藤新一という言葉は必ず1日何度かは目にする名前だった。有名人だから、かっこいいから、とかそういうので芸能面とかワイドショーで取りざたされるのではなく。新聞1面で、毎日解決される事件と一緒に載っているのが彼だった。難事件という難事件はすぐに解決する。それが彼。けれど、この数ヶ月。ある日を境にぱったりと見かけなくなった言葉。行方不明説、死亡説がここ最近まで流れてきていたほどだったから。そんな彼のことを芸能面に疎い妹が、今ここで、その表情で口に出すことに対して、一種の不安が心中駆け巡る。

「志保。・・・まさかあなた」

そこまで言って明美は口を噤んだ。一瞬志保がびくり、としてこちらを見つめる。しかしそれ以上口にすることはなかった。聞いてはいけない言葉だと思った。いや、聞くのが怖かったのかもしれない。妹がこれから何をしようとしているのか、それとも既に何をしてしまったのか。それを確かめることが怖かったのかもしれない。だからこそ、早く抜け出させなくては。妹がこれ以上手を黒い血で染める前に。

「・・・それで？その『工藤新一』がどうしたの？」

平静を装い、明美は妹に言葉を続けさせるよう促した。志保は目の前のオレンジジュースをストローで啜り、一口だけ喉を潤ませ、

思い切ったように姉を見上げた。

「・・・工藤新一って身の回りに子供なんていなかったわよね？」

「・・・何、いきなり」

妹の表情とその話の内容があまりに違いすぎて明美は思わずぷつと噴出した。

「隠し子とか」

「・・・さあ、そんな話聴いたことないけど」

「・・・そう。ならいいの。ただ、在る筈のものがなくなつてて・・・本来そんなもの隠す必要なん てないのに」

志保は顎に手をあててそこまで言いかけたとき、言い過ぎたのかと思つたのか、慎重に辺りを見渡し、それからしばし口を噤んだ。その様子を見つめながら、明美はふと、何かを思い出す。

『そうだ、隠せばいいんだ。』

いつか、幼い自分が思つたこと。あの日、自分が両親と共に向かつた外出先でたちよつとしたイタズラ。あそこなら――。明美はそつとバッグ中に入っていたテープの箱を指先で撫ぜた。

「志保・・・」

「・・・うん？」

「・・・ありがとう」

その言葉に志保は不可解な顔でこちらを見つめていたが、「うん」とぎこちなく頷いたのだった。

2 (前書き)

コミック41, 42巻あたりを見ていただけるとよくわかると思います。

それから丸1ヶ月、時は過ぎていた。ここまで来るまでには相当時間を要した。ずいぶん長い時間この問題と向かい合っていたような気がする。

十八年前、自分が親に連れてきてもらったかつての父親の実家は一度しか連れて行ってもらったことがなかった所為もあり、皆無とっていいほどその家の情報は頭の中に記憶されてはいなかった。しかし数少ない遺品の中に奇跡的に含まれていた昔の父宛の手紙によって、あの場所の住所がようやく確定することができたのだ。それから綿密な計画を立てた。どうやったら組織の目を盗んでその場所まで行くか、自然にカセットテープを隠すことができるか、そして妹の手に組織の目を通さずに渡すことができるか。それを考え答えを出すには、これほどの時間が必要だった。一度も失敗はしてはならないのだから。

明美は高鳴る胸をどうにか抑えて、自分の車が置いてある駐車場に行くため、マンションを出ようとキーケースから家の鍵と車の鍵を取り出す。

ズズズというバイブの音に振り返ると、TVの上で、置き忘れた携帯電話がメール受信をしていた。どうやら恋人からのメールであるらしい。N・Yで未だ仕事上の彼からだ。メールにはマメな方ではないのに。

『気をつけて』

たった一言の言葉。自分がこれからすることを昨日延々と話して聞かせたから心配してくれたのだろうか。

「・・・ありがとう」

画面を見つめ、明美はふっと笑みを零した。

それから、携帯電話を折りたたむと、それをスカートのポケットに忍ばせ、再び靴に足を入れた。

朝早く東京の自宅から車を走らせ、都内いろんな場所をぶらぶらと回っていた。暖かい日差しに誘われて華の見事に咲き誇る公園に行ったり、銀座でケーキを食べてみたり。次に会ったとき18になっているであろう妹に渡すためのネックレスや指輪。洋服などを見て回ったり。そんなことをしていたらお昼も過ぎて日が傾きかけてきていた。明美は時計を見てそろそろかな、と呟く。ちらりと視線を後ろにやれば、観光地をぶらぶらとしている自分に対して組織の目は完全に緩くなっている。

「計画通りだわ」

明美は思わずそう独りごちて、小さく笑った。

これからあの場所に行き、カセットテープを瞬時にあの場所へ隠し、すぐにあの場所から離れなくてはならない。本当にぶらりと立ち寄っただけかのように見られなくてはならない。此処からあの、

「出島デザイン事務所」まで車で飛ばして約一時間。その時間帯ならちょうど誰かがいる時間だ。できることなら早く渡したい。妹用に小さなシルバーのリングをはしうと、足早に外に出る。そして車に乗り込むと、郊外へ向けて車を発進させた。

3 (前書き)

こちら。4 1, 4 2巻をぜひ熟読してみたくださーい！

出島デザイン事務所。かつての父親の実家にたどり着いたのは午後5時を回っていた。東京を出たのは3時前だったが、偶然を装うために、その場所へも直接行かないようにしていたから。

「ようやくついたわね・・・」

思わず本音がポロリと出てしまってから、慌てて自分の口を押さえる。しかし確かめるように辺りを見渡せば、いつの間にか組織の気配すら感じられなくなっていた。

まさか帰ったのだろうか。

自分をストーキングするぐらいだからきつと組織の末端クラスではあるとは思ったが、それでも組織の中に身を置く人物。「宮野明美」と「出島デザイン事務所」の関係ぐらいわかるはずなのに。この静寂すぎるほどの静寂は一体何だというのだろう。それともこれこそが罠なのか。どっちにしても早く事を起こし、この場所を離れなければいけないことには変わりはないのだが。

呼び鈴を押すと、面倒くさそうな表情でキーチェーンごしから男のぎよろりとした瞳が顔を覗かせる。一瞬殺気のような鋭くぎらぎらとした何かを感じ、明美はぎよつと狼狽^{たじろ}いだ。

「何？新聞の勧誘か何か？」

無愛想に男は尋ねる。明美は切羽詰ったような、そして少し頬を赤くさせて恥ずかしそうな申し訳なさそうな表情を作ると、

「いえ。あの・・・すみません。以前この家に住んでいた宮野厚司の娘なんです。あの、その・・・近くを通りかかったもので。あの、突然ですがおトイレ貸していただけませんでしょうか？」

「・・・え？・・・宮野さんの？・・・ああ、ちよつと待って」

慌てたようにガチャガチャとドアの鍵を開けると、薄く頭の禿げ上がった背の高い中年の男性が顔を出した。その顔を見て、明美は思わず「あ」と呟いた。忘れていた顔が、欠けていたはずの記憶のパーツがまるで早送りをしているかのように、次々と修復されていく。

17年前、この場所で、たくさんイタズラをした。そのきっかけを作ってくれたのがこの男だった。彼の些細な一言から始まったイタズラ。仕事道具を隠し、仕事をどうにかさせないようにして休んでもらおうとした、ちよつとしたイタズラ。彼のことがあって、今こうしてカセットテープを持ってやってきた自分があるから。明美は思わず組織がまだ自分を監視しているのではないかという緊張を忘れて、にっこり微笑み、頭を下げた。

「こんにちは、お久しぶりですね、宮野明美です。一度ここに両親に連れてきてもらってお邪魔させていただいたのですが。覚えていらっしやいますか？」

「・・・ああ、覚えているとも。ビックリしたね、見違えたよ」

ほつとした表情で、彼は答えてくれた。その後で自分は、今井と行ってこのデザイン事務所で、父の友達の元で二十数年働いていることを教えてくれた。明美はさっき新聞の勧誘員かと疑られたときの彼がまるで嘘だったかのように優しい表情でぺらぺら話す彼の顔を見ながら、ここにいれば常になくてはいけない緊張が、しだいにほぐれていく自分に気づいていた。17年前に1度だけ遊びに来た

自分に対してこれほどまでに温かく迎えてくれるとは少しも思ってもみなかった。しかしそれは自分が女だからという様ないやらしい視線ではなく、本当に自分に対しての純粋な気持ちが感じ取れたから、とても満たされた気持ちになっていた。

「誰だい？」

派手な原色のバンダナを巻いて、奥から同じく中年の男が顔を出す。その男もかつて見たことある人物だった。

「宮野さんとこの娘さんだよ。明美ちゃん。ほら、一度遊びにきてくれただろ？これぐらい小さいときでさあ」

手で背丈を表して見せながら、男は懐かしそうに目を細めた。

「・・・あ、ごめんなさい。トイレ・・・貸してもらっていいですか？」

「あ、ゴメンゴメン。作業場に入ったら、突き当たって奥の部屋だよ」

禿げ上がった男、今井は慌てて作業場を指差した。明美は慌てて小さく会釈をすると奥の部屋に足を運んだのだった。

彼が教えてくれた通り、指差された向こうには作業部屋があった。20年前、自分が走り回った場所。仕事の都合上か、家具やモノの配置は少しも昔と変わっておらず、明美は思わず微笑んだ。それから、

「・・・思い出に浸っている場合じゃないわよね・・・」

と呟き、再び足を踏み出した。

トイレの中に入ると、鍵をロックし、それから自分の胸に手を当てて、何度か息をついた。

今まで難なくクリアしてきたのだ、失敗するわけがない。そう自分に勇気付けて、気持ちを落ち着かせる。

幾分落ち着いてきたのを確認した後で給水タンクの蓋を開けると、ぶかぶかと浮き球が浮かんでいるのが最初に目を留める。その浮き球を取り、浮いていた面を表に向けると、ガムテープでビニール袋が、確りと取り付けられている。中身は、シャープペンと定規。明美はそれを取り出すと、思わず口許を綻ばせた。

次に明美はバッグから、同じ大きさのビニール袋を取り出した。ただ、その中身は全然質量が違い、昨日まで常に手渡しで渡すためにバッグの中に隠し持っていたカセットテープ。明美は淡々とそのビニール袋をガムテープでしっかりと固定し、蓋を閉める。・・・それまでの所要時間。たった3分。

仕事を終え、作業部屋を通ると、今井がコーヒーマーカーで、ちょうど珈琲を沸かしてくれているところのようだった。そんな彼に対して申し訳なく感じつつ、明美はその後姿に声を掛けた。

「ごめんなさい。突然トイレお貸ししていただいてありがとうございます。でした。では・・・」

「えっ？もう帰るのかい？」

驚いたように今井が勢いよく振り返る。ええ、と明美は心底申し訳ないという表情を浮かべる。

「今日はちょっと用事があるので・・・」

「珈琲一杯ぐらい飲んでいけばいいのに」

玄関先で、靴を履いている自分を見ながら、本気で残念そうな今

井に対して、明美はにっこり笑って言葉を返す。

「一週間ぐらい経ったらまた来ます。今度は妹を連れて」

「・・・そうかい。いつでもおいで。思い出話をゆっくりしたいんだ。今の君の話も是非聞きたいんだ。・・・待ってるからね」

その言葉に軽く会釈をすると、明美はゆっくりとドアノブに手をかけた。が、思いなおしたようにバッグからあるものを取り出すと、今井が見ていない隙に下駄箱に隠し、それからゆっくりとドアを開けたのだった。

4 (前書き)

4 1, 4 2 卷は必ず読んでくださると嬉しいですよ V

自宅に帰るとすぐに今日の仕事の緊張を解きほぐすために風呂を沸かす。それから、留守番電話の着信履歴を見ると、志保からのメッセージが1件残されていた。明美は思わず微笑むと、再生ボタンを押す。

『ピー。・・・ごめんなさい。来週急に人と会う仕事が入って会うことができなくなりました。再来週、どうにか会えるように頼んでみます。それでは』

そのメッセージに思わず脱力して、明美はふらふらとよろけるようにソファに座り込み、大きく溜息をついた。

どうせ志保が会おうとしているのはあの男に決まっているのだ。例えそのことを隠そうとしても、姉である自分には何でもお見通しだということを、妹は少しもわかっていない。それは自分にとって、ある意味好都合ではあるけれど。

早く、抜け出させなくては。

あの組織の中で言いように使われている妹が不憫でならない。無感情を装っているけれど、言葉の節々に、押さえ込んでいる妹の感情が伝わってきていたから。できればまた沢山話したい。電話越しでは離せないことも沢山ある。いろんな話を聞いて妹の不安や不快なもの全て、取り除いてあげたい。・・・けれど。

「再来週、私はあなたに会えるかしらね」

つと口に出たその言葉に、自分でも思わず苦笑してしまう。

それから明美は今まで持っていたバッグから、あるものを取り出した。最後に残った一つのカセットテープ。それをデッキにセットすると、再生ボタンを押した。

ジーという音の後、母から明美にあてた最後のメッセージが流れ始める。

組織に対しての恨みつらみではなく、シルバーブレットの存在を明らかにした、希望に満ちた言葉の数々が。

志保と同じく、未来に歩いていく自分に向けたメッセージが。

『……明美、お母さんはあなたを産んでとてもよかったと思ってる。とてもいい子だもの。こんな素直な、やさしい子を娘に持てたことが、私たちにとって何より誇りです。ありがとう。でもね、そんな貴方をお願いがあるの。絶対守ってもらいたい約束』

その言葉に、明美はゆっくりと顔を上げる。『いいこと？』テープの向こうの母親が言った。すう、と息を吸い上げる呼吸の音がする。この呼吸の音がすきで、いつも自分の顔が自然と綻んでしまう箇所でもあり、自分もその約束と一緒に口ずさもうと準備する箇所でもあった。けれど、今日は敢えて口を閉じ、母親の声に耳を傾けていた。

『自分自身に素直に生きてちょうだい。明美は自分の幸せより他人の幸せを考える傾向があるから。お母さんやお父さんと同じ道だけは歩まないで。そして志保と仲良く暮らして欲しいの。』

……そのためにも無理だけはしないで。あなたと志保が心から笑って生きることがお母さんやお父さんにとって一番の幸せなんだから。だから、あそこに歯向かうことだけはしないで。あなたは決して動かないで。待っていればあの子を助けるシルバーブレ

ットが必ず来るから。だから、その時を 待つて。あなたはあの子の支えでありつづけてちょうだい。生きるのよ？生きて、生きて、生き続け るのよ？志保のために。私たちのために。・・・そして何より、あなた自身のために』

「・・・わかってるわよ、お母さん」

明美はポツリとつぶやいた。再び落ち込んだ気持ちに母の言葉によつてまたエネルギーが沸いてくる。

「死ぬわけにはいかない」

でも。

「待つてるわけにはいかないの。・・・早く志保をあそこから助けなくちゃ」

もう、シルバートレットは待てない。この十数年ずっと待てども現れなかったではないか。シルバートレットが現れなければ、私がシルバートレットになるしかない。組織が恐れるシルバートレットに。あの子を救う、王子様に。

——そう、とうに自分の中で機は熟し、賽は投げられたのだ。

「・・・親不孝でごめんなさい。だけど、うまくいけば親不孝にはならないでしょう？」

テープが回りきって、沈んでいた再生ボタンがカチャリと音を立てて上にあがる。それを見つめながら、明美は小さく呟いた。

「・・・応援しててね、お母さん」

＜FIN＞

4（後書き）

2006年度宮野の日参加作品。

これは意外と41巻、18巻、2巻あたりを見ながら書いたらスラスラ行きました（笑）。

彼女がああの行動に出たのは何故か。41巻の、デザイン事務所の人たちの台詞をもとに、

18巻のあの哀ちゃんの回想を元に、そして2巻の明美さんとジンの対峙をもとに、
いろいろ想像して、行き着きました。

また、最後に彼女が聞いていたテープですが、志保さんにテープがあるってことは、明美さんにも

テープが1つでもあったもいいんじゃないかって思ってた。

そして彼女も、今の哀ちゃんみたいに、何度も何度も聞いていたんじゃないかと。

そんなことを想像しながら作りました。

とても思い入れの強い作品です。書きながら自分でも切なくなってきたりして。

「・・・明美さん・・・！！・・・おかーさん！！！」みたいな（苦笑）

そんなわけで（笑）

ここまでお読みくださいまして、ありがとうございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5906/>

はじまり

2010年10月8日13時09分発行